

『ライプツィヒ・コラール集・Die Leipzig Choräle、BWV651~668a』

高田重孝

作品概略

晩年の J・S・Bach（1685～1750）は若い頃書いたコラールの作品の整理を始め、それらを改訂した上で自分の手で書き写した。現在ベルリン国立図書館に保管されている手稿譜は、バッハがライプツィヒ時代の 1730 年から 1740 年にかけて記入した楽譜で、他の作品と共に 18 曲のコラール作品が書き込まれていて、そのコラール作品群を『18 のコラール集』または『ライプツィヒ・コラール集』と呼んでいる。ただし実際にバッハ自身が書き写したのは最初の 15 曲である。15 曲の内訳は、最初に 1730 年頃（45 歳）に 6 曲のオルガンのためのソナタ（トリオ・ソナタ・BWV525~530）を記入した。その際にバッハはこのソナタを書き込むために必要な倍の用紙を用意したが、その残りの部分は約 10 年間空白のままであった。それから 9 年後、1739 年から 1742 年（57 歳）の間に 2 頁の空白をあけて 13 曲のオルガンのためのコラールの作品（BWV651~663）を書いた。更に 5 年後の 1747 年（62 歳）、1746 年か 1747 年に 2 曲（BWV664~665）を記入した。そして 1747 年から 1748 年の間に 4 頁、2 つの見開き頁に、1747 年にミーツラーの「音楽学協会・Sozietät der musikalischen Wssenschaften」に入会するに際して、印刷して提出したコラール『高き天より私はやってきて・Vom Himmel hoch da komm ich her』の旋律主題によるカノン形式の変奏曲（BWV769）に修正を加えたものを書き込んだ。この記入された後の頁の残りの部分と、現在は失われてしまった次の頁にかけて、コラール『私はここに貴方の御座の前に進みでて・Vor deinen Thron tret ich hiermit』（BWV668）が書き込まれている。この手稿に記入したバッハの自筆譜はいずれも浄書体で、作曲のために作成した手稿から書き写したものであり、手稿の状態から、誰かに贈る目的ではなく、自らの作品を整理保存するために作成したと考えられる。バッハ自身が書き写したのはこの 15 曲までで、続く 2 曲は弟子であり、娘エリザベト・ユリアーナ・フデリカの夫・ヨハン・クリストフ・アルトニコルが口述を筆記した。『主イエスはわれらを救い給う・Jesus Christus, unser Heiland,』（BWV666）『聖霊来たれや、渇いた心に・Komm, Gott Schöpfer, Heiliger Geist』（BWV667）この 2 曲を加えた 17 曲を『17 のコラール集』（BWV651~667）と呼ぶこともあるが、ベルリンの手稿譜には、バッハが臨終の床でアルトニコルに口述筆記させた『苦しみと悩みの中にある時・Wenn wir in höchsten Nöten sein』（BWV668a）を加えて『18 のコラール集』または『ライプツィヒ・コラール集』と呼ぶようになった。

15 曲の自筆のコラール曲とアルトニコルの筆写による 2 曲には、いずれもバッハがヴァイマル時代に作曲した原曲が残されていて、ある曲は大幅に拡大された曲と、長さはそのままに細部に手を加えて書き直した曲の 2 通りがある。手稿の最後の曲『苦しみと悩みの中にある時・Wenn wir in höchsten Nöten sein』（BWV668a）は、目の見えなくなったバッハが口述させた冒頭部分の 25 小節半だけが残されている。この曲の原曲は『オルガン小曲集』の同名のコラール『苦しみと悩みの中にある時・Wenn wir in höchsten Nöten sein』（BWV641）である。

バッハが最初の 13 曲を書きだした 1739 年から 1742 年という時期は、クラビーア練習曲集第 3 部 (1739 年) が出版された直後にあたる。このクラビーア練習曲集第 3 部に含まれるコラール集は、教会における日曜・祝日の礼拝で、教会暦に関係なく演奏される、ルター派のミサ、キリエ、グローリア、信仰告白・クレド、主の祈り、等に関係するコラールを集めたものである。これに対して主に教会暦に従って各日曜・祝日によって異なる礼拝の主題に従ったコラールに基づく曲を集めたものが、この『18 のコラール集・ライブツィヒ・コラール集』である。バッハはヴァイマル時代に、オルガニストとしての任務上の必要から、すべての教会暦の日曜・祝日のためのコラールを集めた作品集を作ろうと考えた。この作品集は未完成に終わっている 44 曲の『オルガン小曲集』(BWV599~644) である。未完に終わっている『オルガン小曲集』だが、見開きには書き込むべきコラールの冒頭の歌詞が記入しており、バッハが教会暦に従ってどのコラールを選択したかが判る貴重な資料である。『オルガン小曲集』のコラールは、間奏なしにコラールの 1 節を演奏する、会衆がコラールを歌う前の前奏の役割を持たせてある。それに比べると『18 のコラール集』は、長さがまちまちだが、より拡大された作品で、コラールの歌詞の区切りごとに間奏が挿入されていたり、コラールの旋律自体に装飾が加えられていたり、様々な様式で、礼拝の中の聖餐式の行われている間に演奏されることを目的としている。また、オルガンの試奏等の機会に演奏するための目的もあったと考えられる。また、バッハは、コラールに基づく曲の様々な様式、作曲技法の多様性をこのコラール集の中で示している。それは、降誕祭第 1 日曜のためのコラール『主よ、来りませ。乙女に宿り・Nun Komm, der Heiden Heiland』(BWV 659, 660, 661,) と、グローリアのドイツ語のコラール『神に栄えあれ、感謝をささげる・Allein Gott in der Höh sei Her;』(BWV 662, 663, 664) この 2 曲の旋律が、ともに 3 種類の違う技法で書かれていることから推測できる。

臨終の床にあったバッハは、コラールの原題『苦しみと悩みの中にある時・Wenn wir in höchsten Nöten sein』(BWV668a) を用いなくて『汝(神)の御前に、我いま進み出て・Vor deinen Thron tret ich』とバッハが原題を変えている。死を前にしたバッハの信仰がこの主題を選んだ。バッハの選んだ題から、死を越えて神を待ち望む信仰が伝わってくる。若い頃のバッハは好んで短調の調性を選んで作品にしていたが、年を重ねるごとに、特に老齢期になり、目の病のために視力を失い始めた頃から死を自覚するようになり、それと共に、死を越えて神を持ち望む信仰を表明するために好んで明るい長調の曲を選んで書くようになった。『18 のコラール・ライブツィヒコラール集』もほとんどが長調の曲で構成されている。ただ 2 曲のみ『神は救いを与えたもう・Von Gott will ich nicht lassen.』(BWV658) 『主よ、来りませ。乙女に宿り・Nun Komm, der Heiden Heiland』(BWV 659, 660, 661) は短調のコラールが選ばれているが、コラールの旋律が短調で書かれているだけで、歌詞を読むと、そこには『神は救いを与えたもう』と『主よ、来りませ。乙女に宿り』と言う神の救済の計画が歌われている。いずれにしても、この『18 のコラール集・ライブツィヒ・コラール集』は、バッハのコラール曲の傑作として、数少ない自筆楽譜で残されている貴重な作品群である。

教会暦に基づく分類

聖霊降臨祭

来れ聖霊、神よ・Komm,heiliger Geist,Herre Gott. BWV651, 652,

聖霊来たれや、渴いた心に・Komm,Gott Schöpfer, Heiliger Geist. BWV667

聖晚餐【復活祭前の聖木曜】

新たに装い、暗き罪を棄て・Schmücke dich, o liebe Seele. BWV654

信仰と祈り

主イエスは変えたもう、聖霊を送り・Herr Christ,dich zu uns wend. BWV 655

苦しみと悩みの中にある時・Wenn wir in höchsten Nöten sein. BWV668a

バビロン川のほとりに我らは座り・An Wasserflüssen Babylon. BWV653

受難週

神の小羊、十字架に架かり給う・O Lamm Gottes,unschuldig. BWV656

神を褒めよ、心と技で・Nun danket alle Gott. BWV657

神は救いを与えたもう・Von Gott will ich nicht lassen.BWV658

待降節

主よ、来りませ。乙女に宿り・Nun Komm,der Heiden Heiland. BWV 659,660,661,

神に栄えあれ、感謝を捧げる・Allein Gott in der Höh sei Her; BWV 662,663,664.

復活祭

主イエスは我らを救い・Jesus Christus, unser Heiland. BWV 666

曲目解説

来れ聖霊、神よ・Komm,heiliger Geist,Herre Gott. BWV651, 652,

コラール『来れ聖霊、神よ・Komm,heiliger Geist,Herre Gott.』に基づく2曲。

このコラールは聖霊降臨祭のための有名なコラールの旋律が主題として扱われている。

BWV651 は『ファンタジア・Fantasia』と題され、ヘ長調 4 拍子で書かれている。曲の冒頭ではヘ音（F）のペダルの継続音の上に、主題が分散和音アルペジオ風の主題が3声の模倣で展開した後、ペダルにコラールの旋律が歌われる。

BWV652 ではコラールの主題が、ト長調 3 拍子に書き換えられて、模倣の手法によりフーガ形式で進行する。

バッハは、コラールに基づく曲の様々な様式、作曲技法の多様性をこのコラール集の中で示している。2種類の違う技法で書かれていることと、『オルガン小曲集』（BWV631）で書いた作品よりも拡大された作品で、コラールの歌詞の区切りごとに間奏が挿入されていたり、コラールの旋律自体に装飾が加えられていたり、様々な様式で、礼拝の中の聖餐式の行われている間に演奏されることを目的としている。

バビロン川のほとりに我らは座り・An Wasserflüssen Babylon. BWV653

BWV653 はヴァイマル時代にしたコラール曲を改訂したオルガンソロのための作品。

ト長調 3 拍子、4 声部で書かれている。冒頭、コラールの旋律はソプラノに現われ、それをテノールが追う形でカノン風に展開される。後半ではコラールの旋律はテノールに歌われ、2 つの上声部は旋律の冒頭のモチーフを用いながら対位的な展開をしている。

新たに装い、暗き罪を棄て・Schmücke dich, o liebe Seele. BWV654

BWV654 は、復活祭の聖木曜日、聖餐式を記念するためのコラールが主題となっている。

変ホ長調 3 拍子のサラバンド様式の序奏に始まり、サラバンドのリズムの上に装飾されたコラールの旋律がソプラノ声部で豊かに歌われる。キリストにより罪を贖われた喜びが、高声部に於いて高らかに歌われる。

主イエスは変えたもう、聖霊を送り・Herr Christ,dich zu uns wend. BWV 655

BWV655 は、ト長調 4 拍子、2 つの上声部をペダルが支える手法、トリオの手法で書かれている。曲の冒頭では左手が右手を追いかけてながら模倣を続け、2 声のインベンション的に曲が展開している。ペダルは分散和音的動きで上声部を支えながら、ペダルが曲の終わりにコラールの旋律を堂々と歌っている。

神の小羊、十字架に架かり給う・O Lamm Gottes,unschuldig . BWV656

BWV656 は、受難週のためのコラールを主題としている。同旋律は『オルガン小曲集第 20 曲・BWV618』に使用されている。曲のコラールはイ長調で 3 節からなる短いコラール変奏曲の形をとっている。最初の 2 節は 3 拍子で手鍵盤のみで演奏され、コラールの旋律は第 1 節ではソプラノにあり、第 2 節ではアルトに置かれている。第 3 節では 9 拍子に変わり、コラールの旋律がペダルに現われ、堂々たる長い継続音で旋律を歌っている。

神を褒めよ、心と技で・Nun danket alle Gott. BWV657

BWV657 は、ト長調 4 拍子。コラールの旋律が冒頭から 3 声のフーガで展開される。フーガの展開の中からコラールの旋律がソプラノによって歌われる。

神は救いを与えたもう・Von Gott will ich nicht lassen. BWV658

BWV658 は、ヘ短調 4 拍子、冒頭から装飾されたコラールの旋律が序奏的にソプラノで歌われた後、コラールの旋律が装飾のない原曲の形でペダルで歌われる。

主よ、来りませ。乙女に宿り・Nun Komm,der Heiden Heiland.. BWV 659,660,661,

待降節（アドベント）のためのコラール。同旋律は『オルガン小曲集第 1 曲・BWV599』に使用されている。同じコラール旋律に 3 種類の違う技法でコラールの主題を展開している。

3 曲とも同じト短調 4 拍子で書いてある。バッハは、コラールに基づく曲の様々な様式、作曲技法の多様性をこのコラール集の中で示している。この曲はより拡大された作品で、コラールの歌詞の区切りごとに間奏が挿入されていたり、コラールの旋律自体に装飾が加えられていたり、様々な様式で、礼拝の中の聖餐式の行われている間に演奏されることを目的としている。第 1 曲 BWV659 は、この世に來られる神の足取りをペダルが象徴している。コラールの主題がペダルの上で下から上にフーガで展開され、最終部でソプラノがコラール旋律を装飾しながら降誕の喜びを歌い上げている。

第 2 曲 BWV660 は、第 1 曲よりもさらに華麗に装飾されたコラール旋律を、カノン形式で動く 2 つのベースが支えている。

第 3 曲 BWV661 は、一転して装飾のない無垢のコラール旋律が低音部ペダルに置かれていて、それはまるで神がこの世を支えているかのような印象を与える。その上で神のこの世への到来を表わす喜びに揺れ動く 3 つの声部により主題が対位法により展開されている。

神に栄えあれ、感謝を捧げる・Allein Gott in der Höh sei Her; BWV662,663,664

ルター派においては、ミサ曲の『グロリア』と同じ内容を持つこの曲も、3 種類の違う技法で書かれている。より拡大された作品で、コラールの歌詞の区切りごとに間奏が挿入されていたり、コラールの旋律自体に装飾が加えられていたり、様々な様式で、礼拝の中の聖餐式の行われている間に演奏されることを目的としている。バッハは、コラールに基づく曲の様々な様式、作曲技法の多様性をこのコラール集の中で示している。

第 1 曲 BWV662 は、イ長調 4 拍子。『アダージョ』きわめてゆっくりとした動きの中で、3 声の対位法による序奏で始まり、喜びを表している装飾された旋律が華麗にソプラノによって歌われる。

第 2 曲 BWV663 は、ト長調 3 拍子。喜びの主題はテノールが受け持っていて、ソプラノと同様に、喜びを力強く歌っている。

第 3 曲 BWV664 は、イ長調 4 拍子に戻り、右手を左手が模倣する展開が続き、その展開をペダルが支えているトリオ様式の作風になっている。終盤、ペダルにコラールの旋律が歌われている。

主イエスはわれらを救い・Jesus Christus, unser Heiland., BWV 665,666

復活祭のためのコラール。2 種類の違う技法で書かれている。バッハは、コラールに基づく曲の様々な様式、作曲技法の多様性をこのコラール集の中で示している。この 2 曲はより拡大された作品で、コラールの歌詞の区切りごとに間奏が挿入されていたり、コラールの旋律自体に装飾が加えられていたり、様々な様式で、礼拝の中の聖餐式の行われている間に演奏されることを目的としている。第 1 曲 BWV665 は、バッハが筆写した最後の曲である。ト長調 4 拍子。コラールの旋律に基づく主題が手鍵盤のみで展開され演奏される。最終部においてコラールの旋律がペダルに現われる。

第2曲 BWV666 は、手鍵盤のみによる12拍子の曲で、コラールの旋律はソプラノに置かれている。第1曲と同じように最終部においてコラールの旋律がペダルに現われる。

聖霊来たれや、渴いた心に・Komm, Gott Schöpfer, Heiliger Geist. BWV667

聖霊降臨祭のためのコラール。同旋律は『オルガン小曲集第33曲・BWV631』に使用されている。

BWV667 は、ト長調12拍子の曲で、コラールの旋律が、前半ではソプラノに置かれ、後半ではペダルで演奏されている。この曲は、ヴァイマル時代に書き始められ未完に終わった『オルガン小曲集』第33曲（BWV631）を改訂してより拡大した作品で、コラールの歌詞の区切りごとに間奏が挿入されていたり、コラールの旋律自体に装飾が加えられていたり、様々な様式で、礼拝の中の聖餐式の行われている間に演奏されることを目的としている。バッハは、コラールに基づく曲の様々な様式、作曲技法の多様性をこのコラール集の中で示している。

苦しみと悩みの中にある時・Wenn wir in höchsten Nöten sein. BWV68a

BWV68a『Vor deinen Thron tret ich』とバッハが原題を変えている。

ト長調4拍子。コラールの旋律はソプラノに置かれている。ソプラノの旋律に基づく主題がフーガ様式で3声部に展開されている。この曲は、ヴァイマル時代に書き始められ未完に終わった『オルガン小曲集』第43曲（BWV641）『苦しみと悩みの中にある時』を改訂してより拡大した作品。臨終の床にあったバッハはコラールの原題を用いずに『汝（神）の御前に、我いま進み出て』と題を変えた。死を前にしたバッハの信仰がこの主題を選んだ。バッハの選んだ題から、死を越えて神を待ち望む信仰が伝わってくる。若い頃のバッハは好んで短調の調性を選んで作品にしていたが、年を重ねるごとに、特に老齢期になり、目の病のために視力を失い始めた頃から死を自覚するようになり、それと共に、死を越えて神を持ち望む信仰を表明するために好んで明るい長調の曲を選んで書くようになった。『18のコラール・ライプツツヒコラール集』もほとんどが長調の曲で構成されている。ただ2曲のみ『**神は救いを与えたもう・Von Gott will ich nicht lassen.**』（BWV658）『**主よ、来りませ。乙女に宿り・Nun Komm, der Heiden Heiland.**』（BWV 659, 660, 661）は短調のコラールが選ばれているが、コラールの旋律が短調で書かれているだけで、歌詞を読むと、そこには『神は救いを与えたもう』と『主よ、来りませ。乙女に宿り』と言う、神の人に対する救済の計画が歌われている。

コラール曲目解説

来れ聖霊、神よ・Komm, heiliger Geist, Herre Gott. BWV651, 652,

基曲

聖霊降臨祭（ペンテコステ）のための中世のグレゴリオ聖歌『聖霊来りたまえ・Veni Creator Spiritus』が基曲。1480年頃にはドイツカトリック教会で翻訳されドイツ語で歌われていた。

原曲

この曲の旋律は、原曲の中世のグレゴリオ聖歌『聖霊来りたまえ・Veni Creator Spiritus』の旋律ではなく、原曲のグレゴリオ聖歌の旋律を模したドイツで 1480 年頃に新しく作られた旋律で、1480 年頃エーベルスベルクで 1 節の歌詞に付けられて歌われていた旋律が使われている。『エルフルト堤要・Erfurter Enchiridion』1524 年に収録されている。

マルティン・ルター（Martin Luther 1483～1546）は 1514 年にスイスのバーゼルで出版された Plenarium oder Evangely buoch に収められていたドイツ語訳の第 1 節を採り、自作の 2 節と 3 節を作り、讃美歌を拡大して現在の形にした。ルターが自作した 2 節は『世界の御民はここに集められ、主の御栄を歌い、正しき信仰、心乱さずに堅く守らせたまえ』、3 節は『死の時が来る日まですべての悩みに打ち勝たせ給え』とルターは自分の信仰の確信を表明している。

J・S・Bach, 『教会カンタータ 59 番、175 番』『モテット、BWV 226』

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 125 番
オルガン小曲集、BWV631。

J・S・Bach, 389 Choralgränge 220、221 番。

讃美歌 21 341 番。ルーテル教会讃美歌 122 番。

原曲・Graduale Triplex・グラドウアーレ・トリプレクス、ソレム出版 1979 年 885～886 頁
（歌詞・高田重孝訳）

（参照：オルガン小曲集第 33 曲、BWV631）

聖霊来たれや、渴いた心に・Komm, Gott Schöpfer, Heiliger Geist, BWV631

聖霊来りたまえ（Veni Creator Spiritus・原曲 グレゴリオ聖歌）

『来たれ聖霊』とともにグレゴリオ聖歌の聖霊讃歌の中で最も古い讃歌。850 年頃から歌われ始めた古い歴史と伝統を持っている。作者は確定的ではないがラバヌス・マウルス Rabanus Maurus (776 頃～856) ドイツ・マインツの大司教と推定されている。マウルスはドイツ、マインツの生まれ、ベネディクト会修道院に入り、修道院の教師となり、後に院長を務めた。仁徳の人で、マインツの大司教を務めた。彼の名、マウルスは聖ベネディクトの弟子である聖マウルに由来している。マウルスはドイツ教育制度の創始者として知られ詩人としても有名であるが詩歌は少なく、この歌がカトリック教会において占めた地位は Te Deum に次ぎ中世においては特に威儀を整え、鐘、香、灯明等と共に歌われた。

旋律は本来、アンブロシウス聖歌の中の、復活祭の讃歌『今日は神の作られた日・Hic est dies versus Dei』につけられていたものが、転用されてこの歌詞と結びついて歌われたと推測されている。

10 世紀後半から歌われ始めた単旋律聖歌である。聖霊降臨祭の『夕べの祈り』や『第 3 時課・使徒たちが聖霊を受けた時間にあたる午前 9 時に行われる聖務日課』に歌われ始めた。

11 世紀からは聖職者任職式等、教会会議、戴冠式、聖別式等、教会の最も厳粛な式典・ミサに

於いて用いられるようになった。単純な 3 節の有節形式による讃歌で、旋律も平易で暗記しやすく、当時の一般信徒達によって広く愛唱されていたと推測される。教会第 8 旋法『ヒポミキソ・リディア調』による。ヒポミキソ・リディア調は第 7 音が半音下がった教会旋法である。

日本においては『**サクラメンタ堤要**』1605 年（慶長 10 年）『長崎イエズス会の日本のコレジオにて』発行された『教会の秘跡を授けるための手引き』に掲載されている。本の目的は『その管轄下にある司祭用に』と明記されている。日本で初めて 2 色刷りによって 19 曲のグレゴリオ聖歌が印刷された。我が国最初の印刷楽譜であるこのサクラメンタ堤要には、葬儀のための聖歌 13 曲と司教の管区教会訪問の時のための聖歌 6 曲が印刷されている。**聖霊来りたまえ（Veni Creator Spiritus）**は、司教が公に教会を訪問する時の儀式のための 6 つの聖歌の第 4 曲目、全曲の第 17 曲目に印刷されて、日本のキリシタンたちにも広く知られ愛唱されていた。1524 年、ドイツ、エルフルトで出版されたプロテスタントの最初の讃美歌集にもこの旋律と歌詞が採用されているが、原曲に比べると、旋律がドイツ語の歌詞化に伴い簡略化されている。

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 126 番
オルガン小曲集、BWV 631

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 218、219 番。

讃美歌 21 339 番。ルーテル教会讃美歌 120 番。

原曲・Graduale Triplex・グラドウアーレ・トリプレクス、ソレム出版 1979 年 885～886 頁
（歌詞・高田重孝訳）

バビロン川のほとりに我らは座り・An Wasserflüssen Babylon. BWV653

原詩 詩編 137 篇 1～6 節、

ドイツ語訳 ヴォルフガング・ダハシュタイン（Wolfgang Dachstein 1487～1553）

原曲 ヴォルフガング・ダハシュタイン（Wolfgang Dachstein 1487～1553）

原詩 詩編 137 篇 1～6 節

『バビロン川のほとりに我らはすわり、シオンを思い出して涙を流した。その柳の木々に我らの立琴を掛けた。我々を捕らえ移した者たちが、我々に歌を求め、我々を苦しめるものが、興を求めて「シオンの歌をひとつ歌え。」と言った。わたしたちはどうして異国の地にあって主の歌を歌えようか。エルサレムよ。もしも、私がおまえを忘れたなら私の右手がその巧みさを忘れるように。もしも、私がお前を思い出さず、私がエルサレムを最上の喜びにまさってたえないなら、私の舌が上あごについてしまうように。』

バビロン捕囚

この詩編 137 篇の歌は、紀元前 587～586 年に、新バビロニア王国のネブカデネザル 2 世王の軍隊がエルサレム・ユダ王国を滅ぼした物語に由来する。ユダ王国のユダヤ人たちは首都バビロンを初めバビロニア地方へ捕虜として連行され移住させられた事件であり『バビロン捕囚』と通称する。【バビロニア王国は、現在のイラクの首都バグダッドの南にあるバビロン遺跡、バビロン川はユーフラテス川の当時の名称】

ユダの捕囚民

ユダの捕囚民の大半はバビロニアにあるニップル市そばの灌漑用運河であるケバル川沿いに移住させられた。（エゼキエル書による）この地方にはかつてアッシリア人の要塞があったが、新バビロニア勃興時の戦いで壊滅され荒廃していて、ユダヤ人の移住先にこの地が選ばれたのは減少した人口を補うためと、荒廃した街を立て直すためであったと考えられている。一方では職人たち等の熟練労働者たちは建設中のバビロン市に移住させられて、ネブカデネザル 2 世王が熱心に行っていた新都市建設事業に従事することになった。

ユダヤ人とバビロニア文化

バビロンのユダヤ人たちは、バビロニアの圧倒的な社会や異宗教に囲まれる中で、それまでの自分達の民族の歩みや民族の宗教の在り方を徹底的に再考させられることになった。今迄分裂していたユダヤ民族の互いの結びつき、宗教的な繋がりを強め、失ったエルサレムの街と聖なる神殿の代わりに神の定めた律法を心のよりどころとするようになり、今までの神殿中心の宗教から律法を重んじる宗教としてのユダヤ教を確立することとなった。またこの時期に神ヤハウエの再理解が行われ神ヤハウエはユダヤ民族の神であるだけでなく、この世界を創造した神であり、唯一神である、と理解されるようになった。バビロニア神話に対抗するために、旧約聖書に記されている天地創造等の物語も、旧約聖書学で「第 2 イザヤ」「祭司記者」などと呼ばれている宗教者たちにより記述されていった。イスラエル民族のユダヤ人民族意識（identity・全体同一意識）はバビロン捕囚をきっかけとして確立されていった。

後のローマ帝国以降のディアスポラ（民族離散）の中でも失われなかったユダヤ人民族意識は、バビロン捕囚の時に確立された。

原曲 ヴォルフガング・ダハシュタイン（Wolfgang Dachstein 1487～1553）

バーデン地方のオフエンブルグに生まれ、エルフルト大学に学んだ。カトリック教徒だったダハシュタインはアウグスティヌス隠修修道会戒律厳守派のエルフルトの修道院で修道士となったルターと長年の友人だった。修道会では週日は日に 7 回の定時祈祷において祈りと共に詩編を唱え、歌い続けた。詩編 150 篇を毎週 1 回は全て唱えるほど、詩編は修道士の信仰と生活の 1 部となっていた。宗教改革に伴って修道院も次第に解放されていくと、ルターが改宗の信仰生活、礼拝生活の中にも詩編を生かし唱えることを導入した。

されて普及した。それによりルターが詩編を基にした讃美歌を考えたのは自然の事だった。最初の選ばれた詩編のひとつが『悔い改めの詩編』と呼ばれた第 130 篇だった。『信仰者の全生涯は悔い改めである』（95 カ条の提題の第 1）、聖書の中のイエスの教えから学んだルターが訴えた宗教改革的信仰の直接的な表れだった。ルターの最初の詩編讃美歌が、詩編 130 篇に拠る『深い悩みから私はあなたに叫ぶ・Aus tiefer Not schrei ich zu dir』である。

ヴォルフガング・ダハシュタイン (Wolfgang Dachstein 1487~1553) は 1503 年にエルフルト修道院でルターの学友だったが、1520 年頃にはストラスブールでドミニコ会修道士となり音楽の才能とオルガン演奏に秀でていたのでストラスブール大聖堂のオルガニストに抜擢され音楽監督を務めていた。35 歳の 1523 年、宗教改革の波がストラスブールの街に押し寄せた時、ルター派が多数派となり、後にルターの宗教改革に賛同して修道院も大聖堂も去り、ストラスブールのルター派のトマス教会のオルガニストになった。この時にドミニコ会修道院を出てプロテスタントに改宗している。トマス教会のオルガニストになってストラスブールの礼拝改革にも加わり、1524 年に出版された讃美歌にはルターの訳した詩編 130 篇の讃美歌に旋律を付けている。その後もプロテスタントのトマス教会でオルガニストを続け、1541 年からは再びストラスブール大聖堂のオルガニストになった。27 年後の 1550 年、62 歳、ストラスブール大聖堂が再びカトリック教会に戻ったとき、ダハシュタインもカトリックに再改宗している。

ダハシュタインの人生を考えると、彼にとっては音楽の仕事に携わることとオルガン演奏が、当時のカトリックとプロテスタントの宗教思想の争いよりも大事だったのではないかと考えさせられる。表向きには当時の宗教思想に同調しながら心の内部では宗教思想に左右されことなく、神に忠実に自分に与えられた音楽と言う才能を生かすために自己の音楽を追い求め続けた純粋な音楽家であり、神に対して確立した信仰と宗教思想を持った音楽家であった。

35 歳の 1523 年、宗教改革の波がストラスブールの街に押し寄せた時、ストラスブール大聖堂はカトリック教会よりルター派に明け渡された。ストラスブール大聖堂で音楽監督・カントーラを務めていたダハシュタインも、この時プロテスタントに改宗しているが、その時カトリック思想からプロテスタントのルター派の影響を受けて、1525 年、37 歳のダハシュタインもルター派の考えに基づき、この名曲『バビロン川のほとりに座り』を作曲している。

他に詩編 130 篇を歌詞としている『深い悩みから私はあなたに叫ぶ・Aus tiefer Not schrei ich zu dir』（讃美歌 21 22 番）、シメオンの讃歌による『主よ、平和のうちに・Im Frieden Dein』（讃美歌 21 73 番）が作られた。日本の讃美歌にもこの 2 曲が掲載されている。

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 7 番
J・S・Bach, 389 Choralgränge 23 番。

現在この名曲『バビロン川のほとりにて』は日本の讃美歌には訳されていない。

（歌詞・高田重孝訳）

新たに装い、暗き罪を棄て・Schmücke dich, o liebe Seele.. BWV654

歌詞 ヨハン・フランク (Johann Franck 1618~1677)

原曲 ヨハン・クリューガー (Johann Crüger 1598~1662)

歌詞 ヨハン・フランク (Johann Franck 1618~1677)

現在のドイツとポーランドの国境の町グーベンに生まれ、ケーニヒスベルク大学で法律を専攻した。1640 年・22 歳、郷里に戻り弁護士となり開業した。やがて市議会議員、後に市長として活躍した。当時から詩人として知られ、同時代のルター以後最大のドイツの讃美歌作者パウエル・ゲルハルト (Paul Gerhardt 1607~1676) と並ぶ宗教詩人として多くの讃美歌を作詞した。讃美歌作曲家ヨハン・クリューガー (Johann Crüger 1598~1662) と親交があり、クリューガーはフランクの多くの詩に曲を作っていて名作が数多くある。特に有名な曲は『イエスは喜び・Jesu meine Freude』である。Bach もこの旋律を使って『オルガン小曲集, BWV610』

『モテット第 3 番・Motet III』を作曲している。

詩・曲 (旋律) は最初に第 1 節だけが『霊的教会の歌・Geistliche Kirchen Melodien』Berlin. 1649 年に発表された。残りの全節はクリューガーの有名な讃美歌集『歌による敬虔の訓練・Praxis pietatis Melica』(第 5 版、Berlin, 1653 年) に『聖餐の準備』と題して掲載された。歌詞の中には熱烈な主イエスへの愛と聖餐におけるキリストとの一体化への憧れが歌い上げられている。

原曲 ヨハン・クリューガー (Johann Crüger 1598~1662)

ヨハン・クリューガーは 1598 年、ニーダーラウジッツのグロースブレーゼンという小さい村に生まれた。現在はグーベン市の 1 部となっている。クリューガーの父親はこの小さな村のレストラン兼居酒屋を営んでいた。母親は同じ村の牧師の娘だった。12 歳の時、グーベンのラテン語学校に通い、そこでラテン語と音楽を学んだ。グーベン市教会 (Stadtkirche) で少年聖歌隊員になり、3 年間正規の音楽の訓練を受けた。15 歳になると、クリューガーはニーダーラウジッツで最も古い町ゾーラウ (現ポーランド Zary) おいて遍歴学生として修業を始めた。さらにブレスウラのギムナジウムを経てモラヴィアのオルモーツ (現チェコ) の町のイエズス会の神学院で学んでいる。(プロテスタントとカトリックによる 30 年戦争が始まる 4 年前のことである。) その後 1 年間、南ドイツのレーゲンスブルクでカントールのホンベルガーから体系的音楽理論を学んだ。ホンベルガーは同時代のイタリア・ヴェネツィアの音楽の大家、ジョヴァンニ・ガブリエーリ (Giovann Gabrieli 1532~1585) に学んだ最も進歩的作曲家だった。その後さらにバイエルン、ボヘミア、オーストリア、ハンガリー、モラヴィア、ザクセンと音楽修行の旅を続けた。1620 年・22 歳の時、ヴィッテンベルク大学で神学を学んだ。当時の教会音楽家にとって神学は必須であった。大学在学中から既に作曲者として知られはじめ、1622 年・24 歳でベルリン市の主要教会であるニコライ教会カントールと、ギムナジウム・ツム・グラウエンクロースターの教師として招聘された。カントールとして毎日行われる礼拝の音楽を

担当していた。音楽教師としてギムナジウムでは礼拝のための聖歌隊の訓練、歌や音楽理論の他、数学まで教えている。この時代クリューガーは『音楽概論・Synopsismusica』を著して出版している。1628年・30歳の時、市参事会員の未亡人でベルナウの市長の娘のマリアと結婚。幸せな時間が続くと思っていた時に、同居していた母とマリアとの間に生まれた5人の子供達を次々に亡くし、そして妻マリアも失った。1630年～1640年、クリューガーが30代前半から40代前半にかけての出来事だった。この10年間は作曲も出版も一切なされていない。家族を全て奪われた深い虚無感と悲しみがクリューガーから創作意欲を奪い取ってしまった。

1637年、クリューガー（38歳）は2番目の妻エリザベートと結婚した。若い17歳の居酒屋の娘エリザベートはクリューガーを励まし、クリューガーの精神は徐々に回復して音楽に取り組み始めた。エリザベートとの間には14人の子供が生まれた。1642年・43歳、クリューガーは『新しいあらゆる用途に対応した讃美歌・Neues vollk ömliches Gesangbuch』と名付けた讃美歌集を出版した。ベルリンで初めてのルター派の讃美歌集である。この画期的な讃美歌集は、ルター派正統主義の伝統に立ちつつ、当時あまり歌われなくなっていた讃美歌を削除したこと、教会での使用がためらわれていた叙情的なものを含む新たな讃美歌を積極的に採用した。この讃美歌の表題に『新しい慰め』とあるが、当時の30年戦争で疲弊し荒廃しきったドイツの人々の魂が求めていたものは『慰め』に他ならなかった。表題の中にヨハン・ヘールマン（Johann Heermann 1585~1647）の名前が挙げられている。ヘールマンは『シュレジアのヨブ』と呼ばれていた人物で、クリューガーと同じ時代に生き、同じように家族を全て亡くした経験を持つ詩人であり、ヘールマンが書いた讃美歌には当時に人々が渴望した『神からの慰め』が満ちていた。『神からの慰め』を歌っているヘールマンの詩に、同じ経験を持つクリューガーが『神からの慰め』の曲を付けている。讃美歌の表記は、四声体と通奏低音番号付きの伴奏を入れて、色々な形態で演奏できるように工夫がされている。表記には「礼拝ばかりでなく、小さな集会や個人でも使える讃美歌」と記されている。

クリューガーはその後、1647年に1642年の讃美歌集を改訂した『歌による信仰の訓練・Praxis Pietatis Melica』を出版した。この初版の中にパウル・ゲルハルト（Paul Gerhardt 1607~1676）の18曲の新しい賛美歌が加えられた。この讃美歌はその後100年に渡りプロテスタント讃美歌の標準となり、クリューガーの死後も改訂が続けられ、時代とともに新しい賛美歌が加えられて、1736年に出された44版には1316曲の讃美歌が収められている。

ルター派の信仰に立っているクリューガーだが、カルヴァン改革派の選帝候の要請に応じて『詩編歌集・Psalmoriasacra』の編集もしている。クリューガーは他の教派に対して常に開かれた姿勢を取っている。若い修行時代に敵対するカトリックのイエズス会の神学院で学んだことも、クリューガーの思想の視野を広げている。思想の広さと豊かな自由が、クリューガーの音楽と讃美歌集にはある。

クリューガーは晩年の5年間でニコライ教会の牧師として、ベルリンに戻ってきたパウル・ゲルハルト（Paul Gerhardt 1607~1676）と共に働き、1662年に64歳で死去した。

この時代のコラルの特徴は、30 年戦争とペストによって疲弊し荒廃した時代に生きた人々の、絶望的な現実からの神の救いへの渴望と神からの慰めが歌われている。クリューガー自身も深い悲しみの淵と死の恐怖との戦いにもがきながら、神の慰めを求める人々のために讃美歌を作り続けた。これらのコラルは、現在においても、打ちひしがれた人々に慰めと希望の光を与え、弱った信仰を支え続ける力を持っている。

J・S・Bach 『教会カンタータ 180 番 BWV180』

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 304 番。

讃美歌 21 75 番。ルーテル教会讃美歌 251 番。日本聖公会聖歌集 246 番。

(歌詞・高田重孝訳)

主イエスは変えたもう、聖霊を送り・Herr Christ,dich zu uns wend. BWV 655

歌詞 ザクセン・ワイマール候ヴェルヘルムⅡ世 (Wilhelm II、von Sachsen Weimar 1598～1662)

ドイツのアルテンブルグに生まれ、イエナ大学で音楽と数学を学び、30 年戦争の際にはスウェーデン側の総督を務めた。ウェストファリア条約後は音楽と詩作に専念した。

作曲者不明 ?ミヒャエル・ヴァイセ (Michael Weisse 1488～1534)

最初の出版としては、1628 年にドレスデン(Dresden)で出された『ドイツ讃美歌集・Cantionale Germanicum』に手書き譜で掲載されている。この旋律は宗教改革者ヤン・フス (Jan Hus 1369～1415) の出版した最初の讃美歌集にまで溯ると考えられている。

宗教改革者ヤン・フスの影響の中から生まれた自由教会がボヘミア兄弟団教会であり、厳格な聖書中心主義と初代教会を模範とする自由平等を理念として 1467 年に成立した。信徒が讃美歌を歌うことを重視して、1501 年にはチェコ語による讃美歌集を編集している。この讃美歌は世界最初の自国語による讃美歌集であり、ボヘミア兄弟団の考えがルターの考えに非常に近いこともあり、この讃美歌がドイツ語に訳されてルター派教会でも普及した。

ヴァイセはシュレジエン地方に生まれ、フランシスコ修道会の修道士になったが、フスの宗教改革に共鳴して 1528 年にボヘミア兄弟団に参加して、何度もヴィッテンベルクにルターを訪ねている。1531 年にヴァイセが編纂した最初のドイツ語によるボヘミア兄弟団の讃美歌集は、ルター派の教会の讃美歌にも大きな影響を与えた。ボヘミア兄弟団教会は 1618 年に、カトリック教会からの迫害によりボヘミアから追放された。18 世紀にはドイツ敬虔主義教会と融合してヘンフリート兄弟団として復活した。

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 139 番。

讃美歌 21 1 番。ルーテル教会讃美歌 191 番。日本聖公会聖歌集 326 番。

(歌詞・高田重孝訳)

神の小羊、十字架に架かり給う・O Lamm Gottes,unschuldig. BWV656

作詞・作曲者はニコラウス・デツィウス (Nikolaus Decius 1490～1541)。

旋律は中世のグレゴリオ聖歌の基づき編曲したとされている

(参照：オルガン小曲集第 20 曲, BWV618)

神の小羊、十字架に架かり・O Lamm Gottes,unschuldig, BWV618

この讃美歌の作詞・作曲者はニコラウス・デツィウス (Nikolaus Decius 1490～1541)。

デツィウスは南部ドイツ、フランケン地方のホーフに生まれ、後に修道士になった。その後、女子修道院長を務めたが、1522 年、ルターの宗教改革に同調してプロテスタントに転向した。この讃美歌はデツィウスがプロテスタントへの改宗後に作られた。カトリック教会のミサの通常文から『グローリア・Gloria, サンクトゥス・Sanctus, アニュス・デイ・Agnus Dei』の 3 曲をラテン語からドイツ語に訳した。ルターよりも早期にカトリック教会のミサの通常文をラテン語からドイツ語に訳す試みを行って、宗教改革に伴う音楽の脆弱さを既存のカトリック教会の音楽でもって補う試みを行っている。

この旋律は中世の単旋律聖歌に基づき、デツィウスが作曲したと言われている。ラテン語の『アニュス・デイ・Agnus Dei』の歌詞は『世の罪を取り除く神の小羊、私たちに憐れんでください・Agnus Dei, qui tollis peccata mundi, miserere nobis』を 2 度繰り返し、3 節目に『世の罪を取り除く神の小羊。私たちに平和を与えてください・Agnus Dei, qui tollis peccata mundi, dona nobis pacem』と唱える祈りである。

デツィウスはこの原文にプロテスタント的な解釈を加えて、イエスの十字架の上での死、苦しみと忍耐、十字架による個人の魂の救済を加えた。カトリック教会では、司祭が全てを執り成し、聖母マリア、諸聖人、キリストへ執り成しを願うことが教理として教えられていたが、それら一切の教会を通しての執り成しを否定したプロテスタント教会では、神に個人が直接に願い、神から罪の許しを頂くことができるようになった。

J・S・Bach, 『マタイ受難曲、BWV 244, 題 1 曲』

コラール編曲、1085、1095. 4 声コラール集、BWV 401.

オルガン小曲集、BWV 618,

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 190・1 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 285 番。

讃美歌 21 87 番。讃美歌 257 番。ルーテル教会讃美歌 234 番。聖公会聖歌集 372 番。

バプテスト教会新生讃美歌 226 番。(歌詞・高田重孝訳)

神を褒めよ、心と技で・Nun danket alle Gott, BWV657

歌詞 マルチン・リンカルト (Martin Rinckart 1586～1649)

原曲 マルチン・リンカルト (Martin Rinckart 1586～1649)

マルチン・リンカルト (Martin Rinckart 1586~1649)

ライプツィヒ郊外のアイレンブルグの貧しい桶職人の息子として生まれた。町の牧師に音楽の才能を見出されてライプツィヒのトーマス学校で学び、トーマス教会の聖歌隊員になった。更にライプツィヒ大学で学んだ後、1610年にルターの生地アイスレーベンの教会のカントールになり、翌年には牧師になった。当時より詩人として有名で1615年には桂冠詩人の栄誉を授けられた。1617年に故郷アイレンブルクの牧師になり、1649年に死去するまで忠実な牧者として人々に敬愛された。

リンカルトの生涯は、ドイツの歴史上最悪の惨禍をもたらした30年戦争と同時代を生きた。宗教戦争とペストが交互に来襲した悲惨な時代の中、戦争による略奪と飢餓に苦しむ故郷の人々のために献身的に牧師の務めを果たした。近隣の牧師たちがペストにより死んでしまい、地域に残ったただ1人の牧師として4000人以上の葬儀を行った。この歌は1630年に自分の子供たちに食卓の感謝の祈りの歌として作った。

ヨハン・クリューガー (Johann Crüger 1598~1662) の『歌による敬虔の訓練・Praxis Pietatis Melica』Berlin, 1647年に刊行した讃美歌集に収録されて有名になり、1648年に30年戦争が終結してウェストファリア条約が結ばれると、訪れた平和を感謝する讃歌としてドイツ全土の教会で歌われるようになった。

J・S・Bach 『教会カンタータ 79番、192番』

Evangelisches Gesangbuch 1993年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第321番

J・S・Bach, 389 Choralgränge 258番。

讃美歌 21 11番。讃美歌 2番。ルーテル教会讃美歌 358番。聖公会聖歌集 318番。

バプテスト教会新生讃美歌 85番。(歌詞・高田重孝訳)

神は救いを与えたもう・Von Gott will ich nicht lassen. BWV658

歌詞 ルートヴィヒ・ヘルムボルト (Ludwig Helmbold 1532~1598)

原曲 フランス民謡が基の旋律と言われているがドイツに入って讃美歌の旋律に採用された。

ルートヴィヒ・ヘルムボルト (Ludwig Helmbold 1532~1598)

ミュールハウゼンに生まれ、エルフルト大学で哲学教授になった。宗教改革直後のカトリック教会の激しい攻撃の中でルター派福音主義信仰を守ったために大学を追放され、郷里の町で牧師として後半生を過ごした。当時より詩人として知られていて、桂冠詩人の称号を与えられる栄誉に浴している。この讃美歌は1569年、エルフルトにペストが流行して多くの死者を出したときに、町から避難していく親しい人のために作詞した曲と言われている。『キリスト教的家庭の歌・Christenliche Haussgesenge, Nürnberg,』1569年に発表されて、苦難の時の慰めの歌としてドイツ全土に広まり愛唱された。

旋律はフランス民謡だったと言われているが、ドイツに入って讃美歌に採用された。哀愁を持つ美しいフランス的旋律が歌詞と相俟って抒情性のある讃美歌になっている。

J・S・Bach『教会カンタータ 11 番、73 番、107 番、186a 番』

4 声コラール集、BWV417~419.

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 365 番

J・S・Bach, 389 Choralgesänge 325 番。

讃美歌 21 478 番。(歌詞・高田重孝訳)

主よ、来りませ。乙女に宿り・Nun Komm, der Heiden Heiland. BWV 659, 660, 661

原詩 イタリア・ミラノ大聖堂の大主教だったアンブロシウス (Aurelius Ambrosius 339~397) のラテン語の単旋律聖歌の讃歌『Veni redemptor gentium・主よ、来てください、異邦人の救い主よ』。

原旋律 アンブロシウスの原詩に付けられた中世初期の単旋律聖歌で、1524 年の宗教改革後にマルティン・ルター (Martin Luther 1483~1546) が、初期の宗教改革後のルター派の教会音楽を構築するために、当時カトリック教会で歌われていた有名なこの聖歌をドイツ語に訳して、ルター派の教会讃美歌に採用した。

原曲の讃美歌は、1524 年に出版された最初のプロテスタント教会讃美歌集『エルフルト提要・Erfurt Enchiridion』と『ヴィッテンベルク讃美歌集・Geystlicher Gesangk büchleyn』に収録されている。

(参照：オルガン小曲集第 1 番, BWV599)

主よ、来りませ。乙女に宿り・Nun Komm, der Heiden Heiland. BWV599

原詩はイタリア・ミラノ大聖堂の大主教だったアンブロシウス (Aurelius Ambrosius 339~397) のラテン語の単旋律聖歌の讃歌『Veni redemptor gentium・主よ、来てください、異邦人の救い主よ』。アンブロシウスはドイツのトリエールに 339 年頃に生まれ、ローマで政治学の高等教育を受け、北イタリア地方の知事を務めていた。西方教会・カトリック教会で洗礼を受けて、ミラノの司教になった。当時から 4 大教父のひとりとして認められていて、神学者、説教者、教会指導者として卓越した指導力を発揮して、西方教会の土台を築いた。特に礼拝音楽の上で、当時の東方教会で歌われていた、詩編の交唱歌様式 (アンティフォナル・Antiphonae) を西方教会の礼拝様式の中に導入して確立した。西方教会におけるラテン語による聖歌の発展の基礎を築いたと言われている。当時のローマ、ガリア、モザベラ聖歌と並んで、ミラノのアンブロシウス聖歌として、西方教会における初期の礼拝音楽の基礎を築き、音楽の発展に大きな足跡を残している。旋律はアンブロシウスの原詩に付けられた中世初期の単旋律聖歌で、1524 年の宗教改革後にマルティン・ルター (Martin Luther 1483~1546) が、初期の宗教改革後のルター派の教会音楽を構築するために、当時カトリック教会で歌われていた有名なこの聖歌をドイツ語に訳して、ルター派の教会讃美歌に採用した。歌詞はキリストの誕生により『異邦の人々』

にもキリストによる救いがもたらされたこと、その『受肉の神秘』について歌っている。

この讃美歌は、1524 年に出版された最初のプロテスタント教会讃美歌集『エルフルト提要・Erfurt Enchiridion』と『ヴィッテンベルク讃美歌集・Geystlicher Gesangk büchleyn』に収録されている。教会暦の順に編成されている讃美歌集では、アドヴェント・待降節の最初の讃美歌に収録されている。バッハも『オルガン小曲集』を編成するに当たり『ヴィッテンベルク讃美歌集』に倣い、『オルガン小曲集』の第 1 曲目にこの讃美歌を選んでいる。

アンブロシウスのラテン語の単旋律聖歌の讃歌『Veni redemptor gentium・主よ、来てください、異邦人の救い主よ』はキリスト教の創作讃美歌としては最も古く、400 年前後より歌われてきた。この歌詞は 1524 年の宗教改革以前から歌われていて、1300 年代にはすでにドイツ語に訳されて歌われていたことが、残されている当時の文献から証明されている。ルターによって、宗教改革後にドイツ語に翻訳し直されて、今日までこの歌詞で歌われ続けている。

ルターは 1517 年、当時のカトリックの教義に疑問を抱き、ヴィッテンベルク城内の教会の扉に、かの有名な『95 カ条の提題』を掲げて、カトリック教会の改革を迫ったが、教会側との交渉が決裂したために孤立してしまい後に教会側から命の危険に曝されたために、カトリック教会と決裂、新しい宗教・宗派を改革するに至った。カトリック教会では、聖書は聖職者のみに読むことが許されていたが、ルターは、すべての人々が聖書を読めるようにするために、聖書のドイツ語訳を完成させ、カトリック教会とは違うルター派独自の礼拝順序の改訂と見直し、自国語・ドイツ語による教会教義の確立を推し進めた。それに伴い、会衆が礼拝に直接参与する讃美歌の導入が不可欠になった。ルターは色々な方法で讃美歌を創作したが、これら讃美歌の中の重要なものは、伝統的にカトリック教会や修道院で歌われていた伝統的礼拝用のラテン語聖歌をドイツ語に翻訳して、旋律に合わせてドイツ語化している。

J・S・Bach, 『教会カンタータ、36 番、61 番、62 番』

オルガン小曲集、BWV 599.

コラール編曲、699.

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 4 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 264、265 番。

讃美歌 21 229 番。ルーテル教会讃美歌 1 番。聖公会聖歌集 59 番。

バプテスト教会新生讃美歌 156 番。SDA 希望の讃美歌 32 番。(訳詞・高田重孝訳)

神に栄えあれ、感謝を捧げる・Allein Gott in der Höh sei Her; BWV662,663,664

歌詞 ニコラウス・デツィウス (Nikolaus Decius 1490~1541)

4 世紀頃に由来するグローリア (Gloria in excelsis Deo) のドイツ語訳、1522 年

旋律 10 世紀頃の復活祭のためのミサのグローリアの旋律に由来する旋律 (Allein Gott in der Höh sei Her;)

この讃美歌の作詞・作曲者はニコラウス・デツィウス（Nikolaus Decius 1490～1541）

デツィウスは南部ドイツ、フランケン地方のホーフに生まれ、後に修道士になった。その後、女子修道院長を務めたが、1522 年、ルターの宗教改革に同調してプロテスタントに転向した。この讃美歌はデツィウスがプロテスタントへの改宗後に作られた。カトリック教会のミサの通常文から『グローリア・Gloria, サンクトゥス・Sanctus, アニュス・デイ・Agnus Dei』の 3 曲をラテン語からドイツ語に訳した。ルターよりも早期にカトリック教会のミサの通常文をラテン語からドイツ語に訳す試みを行って、宗教改革に伴う音楽の脆弱さを既存のカトリック教会の音楽でもって補う試みを行っている。この旋律は中世の単旋律聖歌に基づき、デツィウスが作曲したと言われている。ラテン語の『アニュス・デイ・Agnus Dei』の歌詞は『世の罪を取り除く神の小羊、私たちが憐れんでください・Agnus Dei, qui tollis peccata mundi, miserere nobis』を 2 度繰り返し、3 節目に『世の罪を取り除く神の小羊。私たちに平和を与えてください・Agnus Dei, qui tollis peccata mundi, dona nobis pacem』と唱える祈りである。

デツィウスはこの原文にプロテスタント的な解釈を加えて、イエスの十字架の上での死、苦しみと忍耐、十字架による個人の魂の救済を加えた。カトリック教会では、司祭が全てを執り成し、聖母マリア、諸聖人、キリストへ執り成しを願うことが教理として教えられていたが、それら一切の教会を通しての執り成しを否定したプロテスタント教会では、神に個人が直接に願い、神から罪の許しを頂くことができるようになった。

J・S・Bach, 『教会カンタータ、85 番 3 曲、104 番 6 曲、112 番 1～5 曲、128 番 1 曲』

コラール編曲、675～677、711、715。4 声コラール集、BWV 260.

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】179 番

J・S・Bach, 389 Choralgränge 12～14 番。

讃美歌 21 37 番。讃美歌 68 番。ルーテル教会讃美歌 231 番。

バプテスト教会新生讃美歌 78 番。（歌詞・高田重孝訳）

主イエスは我らを救い・Jesus Christus, unser Heiland. BWV 665, 666

歌詞 マルチン・ルター（Martin Luther 1483～1546）

原作曲者は不明。原曲の讃美歌は、1524 年に出版された最初のプロテスタント教会讃美歌集『エルフルト提要・Erfurt Enchiridion』と『ヴィッテンベルク讃美歌集・Geystlicher Gesangk büchleyn』に収録されている。

原作曲者は不明。最初の出版として原曲の讃美歌は、1524 年に出版された最初のプロテスタント教会讃美歌集『エルフルト提要・Erfurt Enchiridion』と『ヴィッテンベルク讃美歌集・Geystlicher Gesangk büchleyn』に収録されている。

この旋律は宗教改革者ヤン・フス（Jan Hus 1369～1415）の出版した最初の讃美歌集にまで溯ると考えられている。原曲名は *Jesus Christus, nostra salus*。宗教改革者ヤン・フスの影響の中から生まれた自由教会がボヘミア兄弟団教会であり、厳格な聖書中心主義と初代教会を模範とする自由平等を理念として 1467 年に成立した。信徒が讃美歌を歌うことを重視して、1501 年にはチェコ語による讃美歌集を編集している。この讃美歌は世界最初の自国語による讃美歌集であり、ボヘミア兄弟団の考えがルターの考えに非常に近いこともあり、この讃美歌がドイツ語に訳されてルター派教会でも普及した。

ルターは 1517 年、当時のカトリックの教義に疑問を抱き、ヴィッテンベルク城内の教会の扉に、かの有名な『95 カ条の提題』を掲げて、カトリック教会の改革を迫ったが、教会側との交渉が決裂したために孤立してしまい後に教会側から命の危険に曝されたために、カトリック教会と決裂、新しい宗教・宗派を改革するに至った。カトリック教会では、聖書は聖職者のみに読むことが許されていたが、ルターは、すべての人々が聖書を読めるようにするために、聖書のドイツ語訳を完成させ、カトリック教会とは違うルター派独自の礼拝順序の改訂と見直し、自国語・ドイツ語による教会教義の確立を推し進めた。それに伴い、会衆が礼拝に直接参与する讃美歌の導入が不可欠になった。ルターは色々な方法で讃美歌を創作したが、これら讃美歌の中の重要なものは、伝統的にカトリック教会や修道院で歌われていた伝統的礼拝用のラテン語聖歌をドイツ語に翻訳して、旋律に合わせてドイツ語化している。

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 206 番

讃美歌 21 には掲載されていない。ルーテル教会讃美歌 259 番。

(歌詞 高田重孝訳)

聖霊来たれや、渴いた心に・Komm, Gott Schöpfer, Heiliger Geist. BWV667

歌詞 マルチン・ルター (Martin Luther 1483~1546)

原作曲者は不明。原曲の讃美歌は、1524 年に出版された最初のプロテスタント教会讃美歌集『エルフルト提要・Erfurt Enchiridion』と『ヴィッテンベルク讃美歌集・Geystlicher Gesangk büchleyn』に収録されている。

(参照：オルガン小曲集第 33 番, BWV631)

聖霊来たれや、渴いた心に・Komm, Gott Schöpfer, Heiliger Geist. BWV631

聖霊来りたまえ (Veni Creator Spiritus・原曲 グレゴリオ聖歌)

『来たれ聖霊』とともにグレゴリオ聖歌の聖霊讃歌の中で最も古い讃歌。850 年頃から歌われ始めた古い歴史と伝統を持っている。作者は確定的ではないがラバヌス・マウルス Rabanus Maurus (776 頃~856) ドイツ・マインツの大司教と推定されている。マウルスはドイツ、マインツの生まれ、ベネディクト会修道院に入り、修道院の教師となり、後に院長を務めた。仁徳の人で、マインツの大司教を務めた。彼の名、マウルスは聖ベネディクトの弟子である聖

マウルに由来している。マウルスはドイツ教育制度の創始者として知られ詩人としても有名であるが詩歌は少なく、この歌がカトリック教会において占めた地位は Te Deum に次ぎ中世においては特に威儀を整え、鐘、香、灯明等と共に歌われた。

旋律は本来、アンブロシウス聖歌の中の、復活祭の讃歌『今日は神の作られた日・Hicest diesversus Dei』につけられていたものが、転用されてこの歌詞と結びついて歌われたと推測されている。

10 世紀後半から歌われ始めた単旋律聖歌である。聖霊降臨祭の『タベの祈り』や『第 3 時課・使徒たちが聖霊を受けた時間にあたる午前 9 時に行われる聖務日課』に歌われ始めた。

11 世紀からは聖職者任職式等、教会会議、戴冠式、聖別式等、教会の最も厳粛な式典・ミサに於いて用いられるようになった。単純な 3 節の有節形式による讃歌で、旋律も平易で暗記しやすく、当時の一般信徒達によって広く愛唱されていたと推測される。教会第 8 旋法『ヒポミキソ・リディア調』による。ヒポミキソ・リディア調は第 7 音が半音下がった教会旋法である。

日本においては『**サクラメンタ提要**』1605 年（慶長 10 年）『長崎イエズス会の日本のコレジオにて』発行された『教会の秘跡を授けるための手引き』に掲載されている。本の目的は『その管轄下にある司祭用に』と明記されている。日本で初めて 2 色刷りによって 19 曲のグレゴリオ聖歌が印刷された。我が国最初の印刷楽譜であるこのサクラメンタ提要には、葬儀のための聖歌 13 曲と司教の管区教会訪問の時のための聖歌 6 曲が印刷されている。**聖霊来りたまえ**（**Veni Creator Spiritus**）は、司教が公に教会を訪問する時の儀式のための 6 つの聖歌の第 4 曲目、全曲の第 17 曲目に印刷されて、日本のキリシタンたちにも広く知られ愛唱されていた。

原曲の讃美歌は、1524 年に出版された最初のプロテスタント教会讃美歌集『エルフルト提要・Erfurt Enchiridion』と『ヴィッテンベルク讃美歌集・Geystlicher Gesangk büchleyn』に収録されている。ラテン語からの訳詞はマルチン・ルター（Martin Luther 1483~1546）。

1524 年、ドイツ、エルフルトで出版されたプロテスタントの最初の讃美歌集にもこの旋律と歌詞が採用されているが、原曲に比べると、旋律がドイツ語の歌詞化に伴い簡略化されている。

オルガン小曲集、BWV631.

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 126 番
J・S・Bach, 389 Choralgrsange 218、219 番。

讃美歌 21 339 番。ルーテル教会讃美歌 120 番。

原曲・Graduale Triplex・グラドゥアーレ・トリプレクス、ソレム出版 1979 年 885~886 頁
（歌詞・高田重孝訳）

苦しみと悩みの中にある時・Wenn wir in höchsten Nöten sein. BWV668a

作詞 パウル・エーベル (Paul Eber 1511～1569)。

原曲 ヨハン・バプティスタ・ゼラーヌス (Johann Baptista Serranus 1540～1600)

臨終の床にあったバッハは、コラールの原題『苦しみと悩みの中にある時・Wenn wir in höchsten Nöten sein』(BWV668a)を用いなくて『汝(神)の御前に、我いま進み出て・Vor deinen Thron tret ich』とバッハが原題を変えている。死を前にしたバッハの信仰がこの主題を選んだ。バッハの選んだ題から、死を越えて神を待ち望む信仰が伝わってくる。若い頃のバッハは好んで短調の調性を選んで作品にしていたが、年を重ねるごとに、特に老齢期になり、目の病のために視力を失い始めた頃から死を自覚するようになり、それと共に、死を越えて神を持ち望む信仰を表明するために好んで明るい長調の曲を選んで書くようになった。

(参照：オルガン小曲集第 43 曲, BWV641)

苦しみと悩みの中にある時・Wenn wir in höchsten Nöten sein. BWV641

作詞 パウル・エーベル (Paul Eber 1511～1569)

パウル・エーベル (Paul Eber 1511～1569)。

エーベルはウンターフランケンのキツィンゲンに生まれ、ヴィッテンベルク大学の古典語、自然科学の教授を務めた。ルターの死後、ヴィッテンベルクの市教会牧師兼教区教会総監督になり、ヴィッテンベルク大学長として、フィリップ・メランヒトン (Philipp Melanchthon 1497～1563) と共に、ルターの死とカトリック教会に対するシュマルカルデン戦争の敗北後のプロテスタント陣営の混乱と不安の中で、プロテスタント教会陣営を立て直し、教会を守り抜くために指導的役割を果たした。当時のヴィッテンベルクは神聖ローマ皇帝軍に占領され、ヴィッテンベルク大学は閉鎖され、保護者だった選帝侯は捕虜となり連れ去られた。まさにルター教会は存亡の危機に瀕していた。その中でエーベルはメランヒトンと共にルター派の信徒を励まし、祈りの中で団結を守り、苦難を耐え忍んで、ついに 1555 年、アウグスブルグ和議に持ち込んだ。この詩は、それから 10 年後、今度はトルコ軍が再びハンガリーに侵攻してきた。同時期ペストも蔓延して、ヴィッテンベルクの街を脅かしていた時期にこの詩は作られた。この時、共に戦ってきたメランヒトンもすでに 1563 年に死去していて、エーベルはただひとりでルター派の重責を担っていた。エーベルはひたすら神に助けを祈り求めている。その祈りが讃美歌になった。彼の作ったこの讃美歌は 1 節ごと完結しているのではなく、7 節ある原詩は、1 節～4 節、5 節、6～7 節の 3 部で構成されていて、全説を把握して、はじめて讃美歌の主題の意味が理解できる主旨の讃美歌である。

旋律の原曲は、1545 年、ジュネーヴのサン・ピエール教会のカントールだったギョーム・フランクがカルヴァンの依頼によってカルヴァン派の『ジュネーヴ詩編歌』の『十戒』のために書

いた曲が原曲と言われている、エーベルの弟子のヨハン・バプティスタ・ゼラーヌス（Johann Bapitista Serranuns, 1540~1600）が手を加えた旋律である。

ヨハン・バプティスタ・ゼラーヌス（Johann Bapitista Serranuns 1540~1600）

ゼラーヌスはフランケン地方のアンスバッハに生まれ、少年時代はアンスバッハの宮廷礼拝堂の聖歌隊で歌っていた。ヴィッテンベルク大学でエーベルに学び、アンスバッハのカントール兼牧師になり、生涯をアンスバッハで過ごした。

1 節だけを読むと救いも希望もないように思ってしまうが、2 節以降に、神の慰めに委ねる信仰が明るい旋律と共に歌われている。

オルガン小曲集、BWV 641.

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 366 番

J・S・Bach, 389 Choralgrsange 358、359 番。

讃美歌 21 526 番。ルーテル教会讃美歌 468 番。バプテスト教会新生讃美歌 439 番。

（歌詞・高田重孝訳）